

「公事師𪛇屋甲太夫（まんじやこうだゆう）三代目」著者：幡 大介（ばんだいすけ）

公事師とは、江戸時代の訴訟の際、弁護人の役割を職業とする者。公事宿の主人・下代は、江戸中期以降は、江戸幕府に公認された公事師である。公事宿は、公事宿仲ヶ間を組織し、その営業権を守るとともに、幕府の御用をつとめた。また、奉行所で出入物（民事訴訟）の案件は非常に多く、争いごとに関する目安（訴状）作成や差し紙（召喚状）の仲介など専門家門家としての公事宿は、訴え出る百姓などの庶民や訴えを吟味する奉行所にとって必要な存在であった。

筆者は、NHKのBS時代劇ドラマ「大富豪同心」の原作者で、奇想天外な筋書きを前提とする小説である。

今回の時代小説では、公事宿の公事師𪛇屋甲太夫の二代目が病床であったため、その娘「お甲」が二代目の名代として実在しない幻の三代目をたて、難事件を次々に解決していく話である。

主な登場人物は、二代目𪛇屋甲太夫の娘「お甲」と下代（番頭）の「菊蔵」と𪛇屋に対抗する公事宿「飛車屋」の「六左衛門」と倅の「次郎吉」それにお甲の男で勘定奉行所の支配勘定役である「相原喜十郎」である。またなぜか二代目を影で支える「いかさま師」が様々な場面に登場し、最終的に𪛇屋を救うのである。

【2村間の用水の水利権争訴訟は𪛇屋勝訴、飛車屋の敗訴】

公事の内容は、二つの村の水利権を争う公事で、用水路を掘った主体及び、金を用立てたのはどちらの村であったのかが争点となっている。当時の経緯を記した帳簿や歴史も残らず消え失せてしまっていた。

原告の与田村を弁護する公事宿は𪛇屋で、被告荷沢村の公事宿は飛車屋は、𪛇屋が探しあてた証人を亡き者とする企みを実行するため、地博徒を雇い襲わせようとしたが、𪛇屋のお甲は事前に知っていたため、逆に悪人たちを捕らえ、奉行所に突き出したのである。

本公事での決定的な証拠となったのが、𪛇屋側の証人で、当時の普請役人の清瀬孫十郎であった。それによると与田村の庄屋の陳情により、与田村より人を出すという約定で掘ったと証言した。

奉行所からの沙汰状には、用水の持ち主は与田村であることが明記され、荷沢村が勝手に作った取水口は塞ぐよう命じられ、用水は35年前と同じように下流の与田村に流れるようになった。

【公事宿飛車屋の企みへの対抗策】

飛車屋の六左衛門の企みは、2代目𪛇屋甲太夫の病気が回復見込みがないと判断し、娘のお甲に倅の次郎吉を婿入りさせ、自分は後見人として𪛇屋を乗っ取ることである。幕府公認の公事宿仲間に金を使って、この話を一方的にまとめ、奉行所に上申しようとした。

その動きに対しお甲は、実在しない幻の三代目をたて、難事件を解決して認めさせようとしたのである。

【幻の三代目の大活躍とさなる飛車屋の企み】

上野、下野の百姓衆が、米の運搬を請け負う悪質な船頭に対する訴えである。公事内容は暴利な船賃要求や年貢米のかすめ取りに対する公事案件である。悪人たちの後ろ盾は、川奉行の小山田と川岸問屋たちで賄賂を受け取っていた。表立って奉行所が動きにくいこともあって、𪛇屋が悪党たちをお白洲に引出し、奉行所が吟味し沙汰を言い渡した。

その結果、船賃は元通りとなり、川奉行は隠居し、川岸問屋も厳しく申しつけられた。

次の公事は、奉行所からの差し紙（奉行所からの召喚状）が、馬子の頭分である寅五郎に出ており、𪛇屋の公事の扱いとされた。寅五郎は、水戸街道の荷駄を扱っており、𪛇屋の宿場町の問屋と結託して駄賃をつり上げ暴利をむさぼる悪人であった。𪛇屋は寅次郎一味をお白洲に引出し、宿場の問屋ともきつく沙汰が言い渡された。この案件も、三代目の手柄とされた。公事宿仲間も腕利きの三代目を認める方向でまとまりかけつつあったが、飛車屋の六左衛門はあきらめず、三代目を落とし入れる企みを考えていた。

【幻の三代目を狙った飛車屋の企みを打ち砕く謎の三代目】

飛車屋は架空の公事を作り、お白洲で𪛇屋甲太夫三代目を陥れようとした。お甲はそれと知らず架空の公事を引き受けた。今回も飛車屋は、やくざ者を使って、争いになっていない事案を設定し、偽の原告の百姓たちを集め、吟味中にその百姓たちがいなくなり、被告の村の公事師飛車屋が𪛇屋の不正を暴く筋書きである。

その架空の訴えをする百姓衆に、謎のいかさま師が入り込んで、この企みを逆手に取り、飛車屋の企みを暴き逆に追い込むのである。

お白洲では、𪛇屋が架空の公事を作ったとことが明らかになり、追って𪛇屋の責任を追及する沙汰が奉行所から出されることとなった。やくざ者の一行が引き上げる途中、謎のいかさま師と用心棒の浪人が現れ、明日のお白洲で事実を暴くため、一味を捕らえた。

奉行所の沙汰がお白洲で出されようとしたとき、謎のいかさま師が飛車屋の雇った悪人たちを連れて現れ、飛車屋の悪事を暴露し、飛車屋の主人と下代はついにお縄になった。そこでいさま師が𪛇屋甲太夫三代目を名乗ったのである。そして公事仲間もそのいかさま師を三代目を認めたが、以後行方知れずとなる謎のいかさま師が幻の三代目として活躍するのである。お甲は全く訳が分からないのであるが、そのいかさま師といわれる者は、お甲を子供のころからよく知っているようで、二代目甲太夫を陰で支える謎の人物であった。

今回の公事案件は全て村の百姓が原告である。幕府が百姓の不満による百姓一揆を恐れ、訴訟制度を整備した。訴えに対して、奉行所が、証拠などに基づき吟味し、沙汰（判決）下し、公平な解決を図る仕組みを作ったのである。訴状を作成し、お白洲で理路整然と訴えることは、やはり幕府公認の、法律専門家の公事師が必要であった。今回は幕府公認の公事宿の主人・下代が悪行を働く公事師として登場しているが、幕府公認の公事宿がここまで悪行を働くことがあったのかは疑問である。